

関西View

私を変えた
あの時



総合地球環境学研究所長

安成 哲三さん

京都大学の山岳部に所属していた私は1967

年3月、南アルプス聖岳の山頂付近の稜線（りょうせん）から滑落した。

雪に覆われた斜面を転がり落ち、死を意識する一

方、走馬灯のような現象で瞬時に考えが巡り「こ

のまま死んだら悔しい。他にもやりたいことがあ

る」と何度も思った。

数百メートル転げ落ちたものの、柔らかな雪の層で止

まった。転落中に顔をぶつけて出血したことが幸

いし、先輩が血をたどって救助してくれた。奇跡

的に顔以外にケガはな

く、軽傷で済んだ。子供の頃から六甲山を駆け回り、「自然の中

南アルプスで滑落、死を意識 南米の未開地探検を決意

地球を研究する職業に就きたい」と思い、中学・高校では山岳部に所属したが情性で続けていた時期だった。

下山中、「海外の未開な地域を探検したい」と吹っ切れた。国内外の探検記を読むのが好きで、頭をよぎったのは熱中して読んだターウィンの

「ビーグル号航海記」で書かれた南米。パタゴニアの気候や地形。数人の仲間と探検しようとする約束した土地だった。

翌月、決意を実現しようとして、山岳部を辞めて海外で調査実績がある探検部に転部した。パタゴニアへの思いを話すと、新たな先輩からは「個人

で旅行できる時代に何しにいくんや」と考えの甘さを徹底的に突かれた。しかし、決意して転部した以上、「なにを」と大学の講義はそっちの

けで、図書館の英文資料を乱読。1年がかりでパタゴニアの氷河と地質を調査する企画を立て、顧問らの許可を得た。

関西の企業を半年間かけて回って約800社から1千万円集めて渡航。「南米と南極大陸はどのように離れたか」という

研究のため石を採取する傍ら、年間で1万リットルと大量に雨や雪が降る現地の気候に関心を持った。それが気候学研究への原体験となった。